写真－42　夜景外観（フィルハーモニーのウェブサイトより）

2007年には、バルト・フィルの守護聖人として、ゲンナジー・ゲルショーヴによるフレデリック・ショパンのブロンズ胸像が置かれ、現在でも周辺を含めた整備が進行中である。

なお、芸術監督ローマン・ペルツキはオルガン奏者としても有名で、数々の国際的な賞を受賞している。

（4）関連事項など

旧港側の運河に面した新しいホールのファサードには、伝統的なデザインの中にLEDによる電光掲示が埋め込まれ、伝統と革新技術が融合したデザインが特徴的である。（写真－42）また、隣接するレンガ造の古い建物も高品質のホテル等に改装され、荒廃した場末の廃墟から文化的な魅力的な場所への転換は上手に進行している。

グダンスクには、古い産業遺産をアートの拠点に改装した事例として「アーティスト・コロニー（Kolonia Artystów）」もある。（政府観光局のウェブサイトでも触れられている。）グダンスク造船所跡などに2001年頃からこうしたコロニー（アーティストが居住して創作活動など行う、いわゆる「ソーホー」のような一角）が点在している。

造船業という実業の伝統のある都市で、芸術、教育といった社会文化的な取り組みを活性化する文化政策が展開しているのであるが、今回の調査ではカバーできなかった。大変興味深いテーマであり、続けて調査対象とすることが望まれる。

5．シプ・ヴィルソン（Szyb Wilson）：カトヴィツェ

シプ・ヴィルソン（Szyb Wilson）＝「ヴィルソン坑」は、カトヴィツェ郊外、ニキショヴィエツ（Nikiszowiec）、ヤーノフ（Janów）、ショピェニツェ（Szopienice）の3地域の境界の炭鉱跡にある。

シプというのは、英語では「シャフト」、巻き上げ機の付いた炭鉱の竪坑櫓のことで、ヴィルソンというのは、米国大統領「ウッドロウ・ウィルソン」に因むものである。

カトヴィツェはシロンスク（シレジア：ドイツ語ではシュレージェン）県の県都で、同地方を代表する工業都市である。シロンスクにはヨーロッパ有数の大炭田があり、石炭のほか、亜鉛・鉛なども採掘されるポーランド最大の鉱工業集積地帯で、近代工業化が最も進んだ地域である。豊富な天然資源と産業立地は、ただでさえ国境を接する隣国の干渉を受け続けたポーランドにとって、最も熾烈な争奪の対象となってきた。

30km南東にはナチスの強制（絶滅）収容所があったオシフィエンチム（アウシュヴィッツ）がある。

シプ・ヴィルソンは、自然環境、社会環境ともに荒廃した産業衰退地域で、放棄された炭鉱施設をアート・センターに改装して、地域の社会環境を改善しようという文化政策の一端を担う施設である。

以下、同施設のウェブサイト（http://www.szybwilson.org/）などを参考に概要を紹介する。

（1）沿革

ヴィルソン坑の歴史は1926年に遡る。今日修復再整備されたギルドホールと蒸気機関棟などを含む炭鉱のもと名前は「リヒトーフェン（Richtofen）」と「ハルダ（Hulda）」であった。

1935年に米国大統領「ウッドロウ・ウィルソン」にちなんで「ヴィルソン坑＝シプ・ヴィルソン」に改名され、第2次大戦後は「ヴィエチョレク（Wieczorek）鉱山」の傘下に入った。

1995年ヴィルソン坑は閉鎖。

1998年から「有限責任会社プロ投資（Pro Invest LLC）」のヨハン・ブラザーズ（Johann Bros）、と、「エコ＝アート財団（後述）」の理事長モニカ・パック（Monika Pac）は支持者達の協力を得て、この歴史的な施設を現代アートのギャラリーに転換する事業を始めた。事業は施設本体の修復・改装に留まらず、周辺地域の社会再生（祭活性化）事業も含んでいる。

かつての炭鉱設備を現代アートのギャラリーに転換するという考え方は、「（近代）工業化が奪ったものは、文化で回復しなければならない」という同施設のモットーによく現れている。

アートギャラリーとしてのオープンは2001年である

その後 10年以上にわたり、重労働と努力と俗世の象徴（炭坑）は、文化と美しさとスピリチュアリティ（ギャラリー）と絡み合い、文化と経済の調和が育まれてきたとされる。炭鉱で現代アートという神聖と世俗の両方を同時に体験することが、シプ・ヴィルソンのユニークなキャラクターを強化しているのである。

（2）概要

シプ・ヴィルソンは大、中、小の3つのギャラリーからなり、展示面積は合計2,500㎡に及ぶポーランド最大のプライベート・アートギャラリーである。柱のない大空間が特徴である。創始者（クリエーター）は前述のヨハン・ブラザーズとモニカ・パック。（写真－43～53）

同施設が立地する地区は、シロンスクでも最も社会的貧困の厳しい地域の一つである。炭鉱が閉山した後、社会的にも経済的にも環境的にも荒廃した地域が残されるのは国際的に共通する課題である。

そこで、「灰色のシレジア」という近代工業衰退のイメージを払拭するために、関係者は現代的な「美」の概念を追求している。

そのため、地域社会の社会的再活性化をはじめ、世界中